

大卒若年労働者の学び経験とキャリア形成——「ゆとり教育」に注目して

平井 晴香

(同志社大学大学院博士前期課程修了)

浦坂 純子

(同志社大学教授)

本論文では、現在の若年労働者、いわゆる「ゆとり世代」のキャリア形成について、その呼称の由来となった「ゆとり教育」の影響に注目する。労働者としてのゆとり世代は、仕事に対して自己中心的で低意欲であると見なされる一方で、時流に適した働き方を模索しているという印象も受ける。これらがゆとり教育に起因するか否かを検証した。

WEB調査から得られたゆとり世代(22~32歳:2062名)と対照群(33~38歳:1032名)のデータを分析した結果、ゆとり教育に熱心に取り組み、それが今の仕事や生活に役立っていると認識しているほど、現職で力を発揮し、転職を繰り返すことは抑制されるが、ゆとり世代は対照群に比べて退職には抵抗がなかった。また、ゆとり教育効果は社会人になってからの学び活動を促進するが、より強度の高い学び活動に関しては、ゆとり世代ではゆとり教育の効果が見られたが、対照群では見られなかった。さらに、ゆとり教育効果を統制してもゆとり世代は対照群よりも有能感が

高く、「限られた時間内で成果を出す」「成長できないが負荷は軽いほうがいい」「プライベートの時間を大切にできる働き方を実現する」といった「これだからゆとりは」と言われかねない就業観を示していた。

ゆとり教育に適応できた者は従来型の企業組織にも親和性を持ち、かつ柔軟なキャリア形成も可能であるが、適応できなかった者は組織人としても未熟であり、柔軟なキャリア形成にも難があるという二極化が見られたことから、ゆとり世代を一括りにする危険性と、ゆとり教育の功罪が明らかになった。

ひらい・はるか 同志社大学大学院社会学研究科産業関係学専攻博士前期課程修了。最近の主な論文に「大学における奨学金受給とキャリア形成——大卒若年就業者の2時点における意識と行動に注目して」(共著)『キャリアデザイン研究』Vol.15(2019年)。

うらさか・じゅんこ 同志社大学社会学部産業関係学科教授。最近の主な著作に『あなたのキャリアのつくり方——NPOを手がかりに』ちくまプリマー新書(2017年)。労働経済学専攻。